



(一)

メリー・クリスマス——この言葉を耳にした瞬間、皆さんは先ず何を思い浮かべるでしょうか？ この日がイエス・キリストの誕生をお祝いする日であること位は、キリスト教の信者でなくともよく知っている筈です。しかし、日本で行なわれている「クリスマス」の行事を静かに考えてみると、クリスマスツリーを飾ったり、プレゼントをお互いに交換したり、みんなで集まってケーキ

クリスマスと子ども

関 史子

を食べたり、サンタクロースからプレゼントをもらう等。純粋な宗教的行事の印象よりも、むしろ宗教を離れ、私達の生活に密着した楽しい年中行事のひとつというイメージが極めて強いのではないのでしょうか。このように本来の意味からいえば、形だけをとり入れたこの日本の「クリスマス」は本当の意味のクリスマスとは呼べないものかもしれません。更に又、十二月に入るとデパート等ではクリスマスソングが流れ、プレゼントや飾り

つけの品が所狭しと並べられます。この傾向は年々エスカレートして、私たちは商業ベースに乗った「クリスマス」という名のお祭り騒ぎに巻き込まれているような錯覚に陥る事さえあります。その他、数多くの幼稚園では「クリスマス」を園児募集に結び付け、参加した父母にプレゼントをしたり、子どもたちに派手な衣裳をまわして、いわゆる「クリスマス・ショウ」を展開している幼稚園の光景をみる時、教育に携る者としては、それは、少からずひんしゆくを買うような世相と云わざるを得ません。

それでは一体、子どもたちにとって「クリスマス」とは何なのでしょう。端的にいえば、それは子どもの生活そのものに欠くことのできない楽しみなものと断言できます。

「デパートでファミコンを買ってもらう」「ケーキやご馳走をみんなで食べる」と云った現実的なものから、「クリスマスツリーを飾りながら、その美しさと神秘さに胸をはずませる」「サンタクロースからのプレゼント

を楽しみに待つ」と云った夢のあるものまで、楽しみ方はさまざまですが、その日が「いつもとは全く違う特別な日」であることは、どの子にとっても同じです。また子どもにとって「夢を育てるための要素が沢山含まれている日」でもあると考えられるのではないでしょうか。

(二)

ここで、日本だけでなく、他の国では「クリスマス」をどのように祝うのか、その特徴を簡単に紹介いたしましょう。『メリー・クリスマス』(R・B・ウイルソン・文、市川里美・画)という絵本の中に、いろいろな国のクリスマスの過ごし方が書かれているのを見つけました。まず「イギリスとアメリカ」はどうでしょうか。クリスマスツリーに豆電球やキラキラ光る飾りを木の枝にとりつける。家族や親せき、友達が集まってご馳走を食べる。だんろの上かベッドの足もとに、靴下をぶらさげる。そしてその靴下の中にサンタクロースから、自分の願いをこめたプレゼントの入ることを夢みながら、イヴ

の夜はふけてゆくのです。これは、日本の祝い方とよく似ていて、日本のクリスマスがどこの国から入ってきたかがよくわかります。

「ドイツ」では十二月に入るとすぐに待降節（クリスマス前の十二月一日から二十四日までイエスさまの誕生を待ち望む期間）のカレンダー（二十四の小さな窓を毎日一つずつ開けていくもので、それぞれに絵が描いてある）を使い始め、クリスマスの来るのを今か今かと楽しみに待ちうけるのです。またお母さん自ら飾りつけたクリスマスツリーを、子どもたちはイヴの夜に初めて目にするのです。これは子どもたちにとって胸おどる一瞬といえましょう。更に又、プレゼントをおねだりする手紙を、おさな子のイエスさまに宛てて書く習慣があります。イエスさまが目をとめてくださるよう子どもたちは一生懸命に工夫をこらすのです。このようにドイツの場合は、子どもの夢を育てるような演出が沢山もりこまれているクリスマスだと思えました。

「ポーランド」のクリスマスは、イヴに一番星が始め

ると、ご馳走を食べ始め、まずうす焼きパン（マリヤ・ヨゼフ・赤ちゃんのイエスさまの絵が押してある）をめいめいに少しずつちぎり、隣りの人に渡します。また床やテーブルクロスの下には、ほし草（イエスさまが馬やお生まれになったことにちなむ）が敷かれ、テーブルにはマリヤとイエスさま用に空いた席が二つ設けられ、マリヤがイエスさまを連れてお客にいらしても、いように用意をしておくという習慣もあり、クリスマスの物語にちなんだ形での過ごし方を、しみじみと知ることができるのです。

「オーストラリア」では、真夏の暑い盛りにクリスマスがやって来るので、海や田舎にピクニックに出かけ、ご馳走を食べます。「インド」では、バナナ・マンゴの木に飾りつけをするなど、その国その国の独得のクリスマスの過ごし方があることがわかりました。

(三)

次に保育者である私にとって、当然見逃がすことので

きない保育の中での「クリスマス」について考察してみ
る必要があると思います。幼稚園には四月からの一年間
に様々な行事があることは、ご承知の通りです。私もも
横浜学園付属元町幼稚園でも遠足、バザー、運動会、生
活展、クリスマス、おもちつき、お誕生会等々がありま
す。それぞれが、子どもたちにとって楽しく、また生活
の節目になっていることは申す迄もありません、その中
でもクリスマスは特に、他の行事と比較して、子どもに
夢の世界に目をむけさせる場面が非常に多いことを感じ
ておりました。サンタクロースの「赤い服」「白いひ
げ」「大きな袋」「トナカイ・ソリ」等。だれ一人として
知らない人はいない位に有名ですが、今日までだれ一人
として本物のサンタクロースに出合った人はありませ
ん。目には見えないその人の存在を信じ、その人からの
プレゼントを待つ。又、クリスマスツリーの美しさに心
を躍らせたり、キャンドルの光を見つめて神秘的な別世
界へひき込まれるような気持ちになる。いずれも現実的な
日常生活とはかけ離れた、「夢の世界(想像)」を信じ、

その中で心を遊ばせる体験のできる大切な機会でしょ
う。

このように子どもに夢を与え、育ててくれるクリスマ
ス、それは、キリスト教とは全然かかわりのない私の幼
稚園でも欠かすことの出来ない大切な行事になってしま
っています。私の園でのクリスマスの過ごし方を具体的
にご紹介いたしましょう。

毎年十二月二十五日近くに「クリスマス会」が行なわ
れます。各クラスの保育室は思い思いの製作物で飾ら
れ、園児はその日の来るのを楽しみに待っています。そ
して当日、クリスマスツリーの飾られたホールに全園児
が集まり、クリスマスにゆかりのある歌を歌ったり、キ
ャンドルの光の中でお話を聞いたりします。また、その
年によって、サンタクロースが登場したり、その人の声
が流れたりするなど、楽しくて而も不思議なことがいっ
ぱいのクリスマス会が催されるのです。またサンタクロ
ースからは、幼稚園生活が尚一層楽しくなるために、皆
んなで使用するもの(例えばコルク積木、上等なママゴ

トセットなど)がプレゼントされます。その他に、子どもの事を世界中のだれよりも大切に思っていてくれるお母さんサンタクロースによるクリスマスにちなんだ人形劇を見たり、お母さんが心をこめて作ってくれたケーキをみんなで少しずつ分け合って食べたりします。

このように私の幼稚園ではクリスマス会が子どもにとっては「楽しいもの」であり、「不思議だな」「きれいな」「うれしいな」「ワクワクするなあ」といった気持が味わえるものであってほしいと願っています。また「みんなで楽しむ」「みんなで分ける」「いっしょに使う」といったことを体験出来るような配慮をしています。こう考えていきますと、クリスマスは保育の現場にとって、欠かす事の出来ないものであり、ぜひ積極的にとり入れたいものといいたいです。

(四)

然らばその行事を通して、私たちは子どもに何を育てていけばよいのでしょうか？

まず第一に考えられるのは、「夢を信じる心」だと思います。「サンタクロースはどこに住んでいるのだろうか?」「本当にいいのか?」「どこから家の中へ入ってくるのだろうか?」このように想像力をフルに働かせて、サンタクロースのことを考える時、子どもの心は不思議な気持でいっぱいになります。そしてその時、子どもの中に「目に見えないものを信じる心」が育っていきます。人はいつも夢みて生きています。昔の人は「鳥のように空を飛んでみたい」という夢を信じて、その実現のために努力し「飛行機」という素晴らしいものを発明してしまいました。「そんな事、無理に決っている!」と事前結論づけられたら、そこからは新しいものは何も生まれてこなかったことでしょう。

また先日、ガンと闘う人たちが欧州アルプスの最高峰モンブランへの登頂に成功したというニュースを耳にした時、その人たちの心には単にそれが「生きがい療法」とどまらず、それを乗り越えて「あの山へ是非登りたい」という夢があったればこそ、素晴らしい成功につなが

がったのではないでしょうか。

人間が生きていく上で「夢」を持つことは絶対必要なことだと信じています。それによって科学が発達したり、意欲的な生き方をする事が出来るなど、「夢」はそれを実現しようとする時、驚く程すばらしい底力人間に与えてくれるような気がいたします。そしてこの事は勿論、子どもたちにもあてはまります。

即ち、子どもの生活を考えた時、それは「夢」にあふれています。例えば「大きくなったら、お医者さんになりたい」というような大きな夢から、「早く自転車に乗れるようになりたい」といった身近な夢に至るまでそれを実現するために懸命に努力をする。その努力の繰り返し子どもにとって「生きる」ということであり、成長へとつながる大切なものだと思います。

更にもう一つ、クリスマスがプレゼントを「受ける喜び」から「与える喜び」を持つためのきっかけになってくれたら……と願っています。

子どもたちは、お誕生日になると、身近で親しい人か

らよくプレゼントを頂きます。

この場合のプレゼントは、本人が今、どんな物を欲しがっているかを、事前に探知していて、或いは一緒にデパート等に出向いて行き、その場で買いたいというような例が多いように見うけられます。

ところが、サンタクロースから頂くプレゼントは、子どもたちが手にするまでは皆目見当が付きません。「一体何がプレゼントされるのだろうか？」と子ども心にも、その期待の大きさと、片や不安の気持ちが入り乱れ、あれやこれやと考えながらますます胸をふくらませ、心はときめきます。そして実際、自分の欲しかったものとピッタリ、プレゼントが合致した時の喜びはひとしおです。

「サンタさんは、こんなものが私にピッタリだと考えてくれたのだなあ!!」「サンタさんは私の欲しいものを持ちやんと知っていてくれたんだなあ!!」その喜びの心が「それではお母さんにも何かあげよう!!」と先ず身近な家族の人に向けられ、更に「お友達にもプレゼントし

たい」という様に周囲の人々へと、輪が拡がってゆくことになります。更に、この考えは即物的なものから、目に見えない心の問題へと展開し、「人の喜ぶことをしてあげる」とか「みんなの役に立つことをしてみたい」というふうに変って来ることができれば、素晴らしい事だと思えます。

あたかも花は美しさを惜しまず、だれにでもその美しさを与えているように。

小鳥は楽しい歌を惜しまず、だれにでもその楽しい歌を与えているように。

人は何かを与える時、その心は豊かになるのです。

「受ける喜び」から物であれ、心であれ、「与える喜び」への転化は、人間にとって最も大切な事ではないでしょうか。ささやかな「クリスマス」の行事を通して、このようなことが子どもに育てられたら……と私は祈っています。

(五)

今回「クリスマス」というテーマを与えられ、保育とのかかわりについて考察してみると、今まで「夢は大切なもの」と何気なく結論づけていたことが、何故大切なのか、そこに深い意味があるのを私なりに整理することができました。即ち夢は、人間に生きる意欲を与えますし、また如何にしたら、それが実現出来るか、いろいろと工夫をこらす時に、創造力が刺激され、そして、失敗しても挫折することなく夢を持ち続けるには、忍耐力も必要となります。

又夢を思い描く時、人は心豊かな気持ちにかられます。そしてこれ等は、人間が豊かな人生を送る為に欠かすことの出来ない「基本的な能力」ばかりです。子どもは思いやりがあつて、しかも心豊かな人間に育てることを保育の目標に掲げている私にとって、「クリスマス」とは、夢の大切さを気づかせてくれる、人間の生活にとつて、かけがえのない行事であることを強調したいと思えます。

(横浜学園付属元町幼稚園)